

二宮公羽夜話

令和二年 第七回 9/11水 資料

人の巻 (報徳の仕法)

第九篇 治國の要道

二二三 p.280 里を仁にする仕法

。子曰、里仁為美。擇不處仁、焉得知。 (里仁 第四一)

。字問は活用と尊ぶ。

。不仁の村里を仁義の村里に改むる。

。子張問行。子曰、言忠信、行篤敬、雖讒言豹

之邦一行矣。 (衛靈公第十五 一五) p.229

p.281 一家仁、一國興。仁一家讓、一國興。讓一人貪戾、

一國作亂。其機如此。此謂一言僨事、一人定國。

(叶) 二宮金次郎の傳、一宮簡以と讀人の言 (大言)

。子曰、苟志於仁矣、無惡也。 (里仁第四一四) p.38

。子曰、學道錯諸極、能使枉者直。 (新淵第十七)

二二四 p.283 其の美をゆえん

。堯は仁をもつて天下を治めた。

「鼓腹撃壤」の逸話。別紙参照

三二五 堯舜 (穀金井) 而飲脯田而食、帝力何有於我哉。

或問子產 子曰、東人也。 (憲問第十四 一〇) p.205

p.284 堯舜もこの病あり。 (論語 顔也第六 一三八) p.229 別紙参照

(中流に葉一の書) (憲問第十四 四五) p.224

二一六 p.285 租税は土地の天分に比せよ

。国に上中下あり。土にも上中下あり。租税もその天分に比して果するより比せよ

二一七 p.286 勢威も命数もある

。おのれの勢威は親先祖から受け継ぐ位の方。拜命は官職の威光に比するものである。

二一八 p.286 復興をける者の急務

。村里の復興をける者は、米や金を蔵に積むことではなし。村吏の衣々に使われゆくことを事務とするべきである

二一九 p.287 仕法も世話もやますまじき事

。みんず良いほど加減が肝要である。夜とくもあま

ゆふの日の過猶不及。(先述第十一一五) p.149

二二〇 p.288 時機を待つ

。およそ天地間の万物の生滅するの法、人々を天地の命にトよまぬので、勝手には減するのを得ず

。茅子↓寒気はは 茅子はエの中は埋まてゆらゆら田つて 冷あつくしあつておつとまの春。雪霜を消さるのを待って

p.289 曾子有疾。有門弟子曰。啓予足。啓予手。詩云

戰戰兢兢、如臨深渊、如履薄冰。而今而後、吾知免夫。小子。(春伯第八一三) p.99

二二二 p.290 中庸は易しく、子思子は難しい

p.291 孟子は書物上の議論に勝つことを目指す。

。聖人の道は五倫五常を行くことにある。学問をしようとすむ平易な道であり、中庸は行の易い

二三二 p.292 根幹技藝の發せざるを種といふ

。「喜怒哀樂之未發、謂之中。」(中庸の義の)

←「根幹技藝之未發、謂之種。」と見るとわかる。

二三三 p.292 無利息金の妙用

。無利息金貸付の法 ↓ 子張曰、何謂「五美」

子曰、君子處心而不費、... (五美第二十一)

子曰

「因民之望、利而利之、斯不費」

p.310

惠而不費乎、

二三四 p.293 復讐言の志より済民の志

。復讐言人道である。 || 二宮翁の教える

。東照公(徳川家康)か西宮上人の説法である。

。相州七福宮の川崎屋孫右衛門は、鎌倉月尊寺の

深海和尚に問て、何とて悔悟する

。法然上人(善願園押鉢使のふと)を生をとりて幼名

勢五丸の父。漆間時国は、日守并立して、石相手を

た。然一夜、新の夢あり討死する。父は勢五丸に仇討ち

二三五 p.295 天災、人災、平昔の準備

。天の暴風雨 ↓ 平日は無用の物ではあるが準備とみる

。人災、暴徒乱民 ↓ 予防(米や金) ↓ 施す。

二三六 p.296 減るべきものか減ゆる ↓ 天下をこみ人と同様である

二三七 p.297 凶作の予知

。凶作の見通しは神の如し。 凶作を予知する。 予知する。 予知する。

三三八 p.277 洪水の予知

○井戸の水、川の流水

三二五 p.298 飢えても草根木皮は食(食)

○多量の食糧を貯蓄すること。病気を予防するやえ、
飢民を救えて、病氣もさる。おそ山の草の食べ方
飢りて、飢持に施す

三三〇 p.299 天災に備える方策

○十一年に一度は必ず起る。

(飢え、大洪水、大風、大地震に備える)

金、穀物を貯蓄(もみ、米)

三三一 p.299 草根を貯る積穀をす

○昔の者の説を聞か、自家の経験に喩す

村毎に積穀をすること勸める

三三二 p.300 米の倉

○米は田穀をす、数十年にても其の積りし

一番備えよ

○料理の仕方、おこし、おこし、おこし

米の貯る方、おこし、おこし

鼓腹擊壤、堯の治世については、「十八史略」に有名な「鼓腹擊壤」の逸話が紹介されている。

それによると、堯が天子の位についてから、五十年くらいたった頃のことだという。いったい天下がうまく治まっているのかどうか、人民が心から自分を天子に戴くことを望んでいるのかどうか、よくわからなくなってきた。考えれば考えるほどわからない。そこで側近の者にたずねてみたが、これまたわからないという。朝廷の役人にたずねてみても、民間の有力者にたずねてみても、やはりわからないという。不安にかられた堯は、自分の目で確かめてみようと思ひ、微服して町に出てみた。

にぎやかな大通りにさしかかると、子どもたちが声を合わせてこんな歌をうたっているではないか。

我が烝民を立つる 立我烝民

爾の極に匿ざるはなし 莫匪爾極

識らず知らず 不識不知

帝の則に順う 順帝之則

わかりやすく訳してみると、こうなる。

みんなが慕らしていけるのは

天子さまのおかげです

頭を悩ますこともなく

おん導きのおんままたに

堯がなおも大通りを進んでいくと、こんどは老人がなにかもぐもぐ嚼みながら、腹つづみを打ち、足拍子をとって（鼓腹擊壤）、こんな歌をうたっているではないか。

日出でて作り 日出而作

日入りて息う 日入而息

井を鑿って飲み 鑿井而飲

田を耕して食らう 耕田而食

帝力何ぞ我にあらんや 帝力何有於我哉

これもわかりやすく訳してみよう。

お陽さま昇れば野良仕事

お陽さま沈めば帰りましよ

井戸を掘っては水を飲み

田を耕せば食べられる

天子さまのお力なんぞ

あってもなくても同じこと

これを聞いた堯は、「ああ、天下はよく治まっているのだ」と、納得して宮殿に帰っていったという。

「鼓腹」とは、腹つづみを打つこと。「擊壤」は、足拍子をとると訳したが、これについては、「壤」とは木靴のようなもので、これを投げて命中を競う遊びだという説もある。いずれにしても、「鼓腹擊壤」とは、老いも若きも泰平を謳歌している姿をあらわしたものであることは、どうまでもない。

堯の時代は、天下はよく治まったのである。



博施
而能
濟
民

濟
衆

大正乙丑秋日

陸澤榮書



別紙
②